

きたがわてつ・林容子著

「美土里くん ありがとう」(あけび書房)

を 読 む

中 村 弓 子

私とその少年、美土里くんを知ったのは、七・八年前にたまたま見たテレビのドキュメンタリー番組によってだった。

それは青森に住む重度の筋萎縮症の少年で、医師には「四歳くらいまでしか生きられない」といわれていたのが、つねに死の危険と隣り合せのまま二十歳になろうとしていた。

体全体の筋肉がまったくそげてしまっ、まるで指人形のように、服の下はほとんど空っぽのようなその様子は、見る者にいかにも命が危うい感じを与えた。

しかし同時にこの脆い肉体に宿る精神の強靱さにも目を打ったのだった。美土里くんは推理小説の大ファンで、いま自分自身で作品の執筆を始めたところだという解説だったが、その執筆風景が非常に強い印象を残した。美土里くんは寝たまままで天井から吊った革

ベルトにだらりと力なく手をかけている。一方、ベッドから少し離れたところにあるタイプの文字盤の上を光が移動しており、必要な文字の上に光が当たった瞬間、美土里くんが手をわずかに動かすとタイプに文字がガシャと打たれる仕組みになっている。思考を練るだけでも苦勞なものを、それを文字化することがさらにこんな大仕事となっているのだ。時々沈黙を破ってはいつまで続くとわからぬこの「ガシャ、ガシャ」という音を聞きながら、私はこの少年の精神の驚くべき強靱さを身をもって感じていた。

もう一つの印象的な映像は、国鉄勤務のお父さんの退職金を前借りしての十日間のヨーロッパ旅行の際のルーブル見物の模様だった。美土里くんはルーブルにあるダ・ビンチの「洗礼者ヨハネ（キリストに洗礼を授けた聖者）」の絵が大好きで、そもそもヨーロッパ旅行そのものが、美土里くんのこれを自分の目で見たいという希望を叶えるために計画されたものだった。この画が大写しになった。それは暗い闇の中に立つ洗礼者ヨハネが、ほとんど優雅とってよいほど美しい微笑を浮かべて右手で天をさしている姿である。それは見る者になにか招かれているという感じを強く与える絵であり、神秘的であると同時に、あまりにも美しいものの与える一種の不吉ささえ感じさせる絵である。そしてこのヨハネの美しさは、そのままこの絵をこよなく愛する美土里くんの心の美しさの化身であるような感じも与えたのだった。

さて、見ることを切望していたその絵を見た満足感に浸りながら秋の金色に輝く並木のあいだを両親に押しももらって散歩する車椅子の美土里くんの遠景は、平和である

と同時になにか言い表し難い悲しみを私に与えた。美土里くんの味わっている幸福がもう彼岸の世界に踏みこんでいるような感じがしたからだ。

このドキュメンタリーで印象に残ったもうひとつのこと、それは美土里くんの世話をする両親の明るさだった。それはおそらく美土里くんを育てることが両親にとってただロスなのではなく、美土里くんからなにかを受けとっているからだ、あの危うい肉体に宿っているだけにその強さと尊さの強烈に目を打つ根元的な「いのち」を美土里くんから受けとっているからなのだろうと私は思った。

さて、この放送から五年後、今から三年前に今度もまた全く偶然に、あの美土里くんのその後を記録するドキュメンタリーを再び目にしたのだった。美土里くんはあの執筆中の作品を『ドライツェーン』という四五〇枚の推理小説に仕上げて出版し好評だったということだった。しかし国鉄勤務のお父さんは、それから間もなく胃ガンで、たった一ヶ月の入院で死んでしまったということだった。美土里くんもお母さんも懸命にその衝撃に耐えていたようだったが、それから三ヶ月後、美土里くん自身、ある会合で食べものを喉に詰まらせて仮死状態になり、いったん回復したものの、とうとう数日後に亡くなったということだった。病院の集中治療室で、目しか動かすことのできない虫の息の美土里くんのベッドに、美土里くんから見える位置にあの「洗礼者ヨハネ」の絵がくくりつけられていた。カメラは美土里くんの頭のほうからそれを写した。こちらを向いてあの美しいヨハネが微笑み天を指している。それはもう肉体的にはほとんど存在していない美土里くんの

いのちが向っている彼岸の入口に立つ天使のごとくであり、美土里くんが究極的にこの絵のなかに魅かれていたかを明らかにしているようだった。

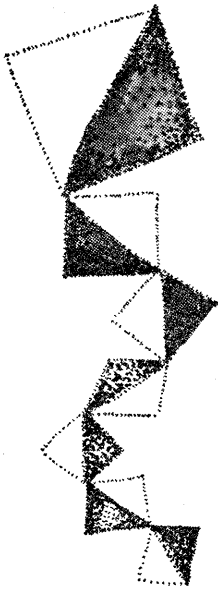
偶然の出会いであるこの二回の放送を通じて美土里くんという少年は、深くて強靱な美しい「いのち」を、ちょうど美土里くんが両親に分け与えたように私にも分ち与えてくれたのだった。

その美土里くんについての本が出たのを、先日たまたま本屋でみつけた。一種のなつかしさと共に、もっと色々知りたいと好奇心も感じた。この本は美土里くん一家と親しくして、「美土里」という曲も作ったフォーク歌手のきたがわ・てつ氏と美土里くんのお母さんの共著である。そこには美土里くん自身の書いた文章も多数あり、美土里くんの間像をさらに内側から知ることができるとは驚きである。

高校時代の美土里くんが書いた数学と宗教についての文は、あの洗礼者ヨハネの画家ダ・ビンチにも遙かに通じるような、科学と宗教の接点をめぐる非常にユニークなエッセイである。——平面に描いた二人の人間は互いに顔を見ることはできない。しかし我々三次元世界の人間からは彼らを同時に見ることが出来る。同様に神が四次元以上の空間に存在すると考えれば、ちょうど三次元から見た二次元のように我々の三次元の世界をすべて見ることができ、神は常に我々の側にいて、しかも我々には見えない所にいるのだということになる。そして我々は、死によって三次元の肉体から離れ高次元の精神だけが神の許に行けるのだ。——と美土里くんは書いている。

また国際障害者年には「今年の障害者年は、障害者が普通の人の気持ちになること、普通の人が障害者の気持ちになること。それが出来れば良い。」と美土里くんは言っている。この障害者観は、美土里くんが亡くなる直前に見た青森美術会小品展について書いた文と不思議な呼応を見せている。

自分はこの展覧会に対してある種の固定観念を持っていた。「青森美術会」という名前がアンチ都会といった、狭いナショナルリズムに彩られた地方芸術を連想させたのだが、しかしこうした考えが間違いであったことを百数十点の絵が自分に悟らせてくれた。むしろ地方性は無意識のうちに表われてくるものであって、この会場を満している、平凡な事物を生き生きと描いた絵は自分に新しい青森の美を教えてくれた。「地方の時代はここにあったのだ。七面倒くさい絵画論など、観る側にはいらぬ。ただ画家との一刻の共感があ



れば、それだけで私は幸福なのである。」と美土里くんは文を結んでいる。

「青森美術会」が目ざすべきものが青森ナシヨナリズムではなく純粋な絵画性そのものであって、そこにこそむしろ真の青森の独自性も出てくるように、障害者が目ざすべきものも、(そして普通の人が目ざすべきものも)それは純粋な「いのち」そのものなのだろう。それは美土里くんの生涯の軌跡が訴えているものでもある。

この本の題名『美土里くんありがとう』は、美土里くんのお母さんの次のエピソードから来ている。美土里くんが食べものを喉につまらせたのをきっかけにして死んだのは自分の不注意ゆえだと自責の念にかられて沈んでいたお母さんが、ドライブ先で「このまま谷に落ちたら」と思わずつぶやいたとき、同乗していた美土里くんの友だちが、前に美土里くんが、「死というものは自分で選ぶものではなくて、神さまが与えるものだ」と言ったと伝えたのである。美土里くんがお母さんを慰めるために用意したようなこの言葉にお母さんは心の中で何度も「美土里くん、ありがとう」とつぶやいたのである。

お母さんだけではない、この本を通して美土里くんに出会った人はみな、美土里くんの「いのち」を分け与えてもらって「美土里くん、ありがとう」とつぶやくことだろう。

(お茶の水女子大学)